

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の――線部の、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① いちじるしい技術革新を果たす。
- ② かつてあの国には王が君臨した。
- ③ 天皇の退位後の称号は上皇に決まった。
- ④ 彼と私は意見を異にする。
- ⑤ 寒い夜はカンショウ的な気分になる。
- ⑥ 昭和はゲキドウの時代であった。
- ⑦ この製品は録画機能をナイゾウしている。
- ⑧ 着物にウラジを付ける。

問二 次の漢字について、あとの各問いに答えなさい。

刻

- ① 部首名をひらがなで書きなさい。
 - ② 総画数が同じものをあとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 弟 イ 豆 ウ 服 エ 吸

問三 次の四字熟語の意味として正しいものを、あとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

一期一会

ア 一生に一度しかない機会。

イ 一年に一度の出会い。

ウ 一緒に行動する大切な仲間。

エ 年度ごとに行う重要な会合。

問四 次の熟語と組み立てが同じ熟語を、あとのア～カから一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 起床

② 無限

ア 失恋

イ 寝台

ウ 違反

エ 販売

オ 未熟

カ 獣医

問五 次のア～エから、言葉の使い方が正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア あまりの貧しさに彼は寝食を忘れて耐え抜いた。

イ 困難な仕事をやり遂げて我々はかぶとを脱いだ。

ウ 「大事な試合だ」と高をくくって臨んだ。

エ 家を買うために爪に火をともして貯金した。

問六 次の文の「な」と同じ意味・用法で「な」が用いられている文を、あとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

・広い庭のある大きな家に住む。

ア いつもは静かなこの公園も桜の季節はとてにぎわう。

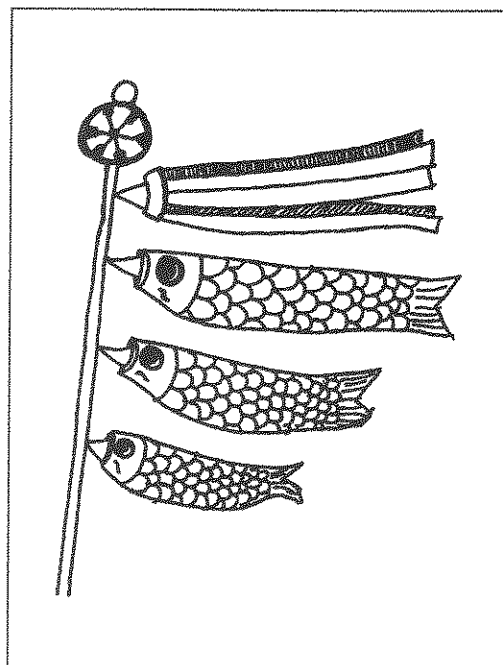
イ 地球温暖化でおかしな天気が続いている。

ウ あの人の苦しみに比べれば私の悩みは小さいなと思った。

エ 春にはきれいな花が我々の目を楽しませてくれる。

問七 次の想定にもとづいて問題の指示通り解答しなさい。

あなたは四月下旬のある日、初めて来日する外国人観光客を案内していました。その時、ある家の庭に、下のイラストに描かれたものが掲げられていました。それを見た外国人観光客から、「あれは何か」と質問されたあなたはどのように答えますか。四十文字以上五十文字以内でまとめなさい（句読点や符号も字数に含めます）。なお、解答は日本語で記すこと。



【二】 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。問いの中で字数に指定のあるときは、特に指示がないかぎり、句読点や符号もその字数に含めます。

「聞く」という言葉を『広辞苑』で引くと「言語・声・音などに対し、聴覚器官が反応を示し活動する」と書かれています。しかし、^①私の思う「聞く」ということは、この辞書とは少し違います。

「聞く」ことに限って、私の演出の指針になっているエピソードがあります。

一九五五年に人間国宝制度が発足すると同時に指定を受けた、^{*}幸祥光という、人間国宝第一号といえる名人がいました。能楽師・小鼓方幸流十六世宗家で、人名辞典などでは「明治以降の能楽師で名人は誰かを専門家が投票したらまちがいに一番になる」などと称された、明治・大正・昭和を通しての名人です。この小鼓の名人が当時のSP盤に自分の演奏を録音することになりました。SP盤は竹針ですから、再生時には常時「ギー」という接触音が残ります。名人は、その試聴テープを聞くなり即座にNGを出し、結局、その録音されたSP盤は私たちに残されませんでした。

「私の鼓の音とは、音と音のあいだにある静寂こそが命なのです」

というのがその理由だったそうです。この一言に空白を支える日本人の精神構造の在りかが、よく現れている気がします。

【ア】

「よおー ぼん ……よおー ぼん」

と鼓が鳴ったときに、その「ぼん」と次の「ぼん」のあいだにこそ私の音がある——というのは、つまり、無音ということです。そのエピソードに出会ったのは、大学生になってからでした。それから、そのことがずっと心に強く残っていて、

「ものを聞くことは、音と音の隙間から、何を聞き取るのかということ」

という強い記憶となり、始終、複数の言葉の行き交う稽古場のなかで、よくそのことを思い出すのです。ですから、言葉と言葉の隙間でいっただい人間の心のなかの何が動き、次の言葉が生まれてくるのかと、必死にその音を聞き取ろうとしているのです。

のちに、^{*}武満徹の『音、沈黙と測りあえるほどに』（新潮社、一九七一年）という本に出会い、「沈黙こそ、音なのだ」という一言で、いっそう強くその隙間の音の在り方を確信しました。

——音と音のあいだ、芝居でいえばせりふとせりふのあいだに、実は騒がしく行き交う会話があつて、そのあいだに人間の心の動きが見えてくる。間というより沈黙の時こそが豊饒なる関係の時間なのだ。

【イ】

人間はふしぎな生物で、耳をすまし、相手の言葉をしっかりと聞こうとすれば、その言葉の途中でも相手が何を言おうとしているのがわかります。作家が書いた劇の流れをどう掴んでいくかは、相手役との言葉と空白のあいだから見えてくるものなのです。

また舞台の空白の時間のなかに、観客の想像力が動くときがあります。心動かされる芝居の瞬間は、間のあいだにいろいろな音や言葉が聞こえてくる、その広がりに出会ったときにあるのです。作家の書いた言葉が情報として入ってきて、観客は物語を構築し、把握していく。物語としての力が見えてくるところは、実は作家の書いた言葉と言葉のあいだで起こる心の動きなのかもしれません。あるとき、稽古場でぼろっと零れるように生まれることもあります。だから、はじめからことを決めてかからずに、その場で起こったことに集中することです。^②必然よりも偶然に生まれることを、稽古場ではより優先する必要があるのです。

【ウ】

人間全体に、聞く力が衰えているように感じます。

他者への伝達手段が、一方通行の意思表示として完全に定着してしまったことにもありますが、携帯電話のメール機能などもその一つです。文明の利便性をあえて否定する気はありませんが、自分の言いたいことを相手に伝える行為が、今や一方通行になってしまい、そこに肉声による対話というダイアローグの時間が失われているのです。

【エ】

^③聞く力は、人間の普通の生活にとって重要です。この世にはいろいろな人間が生きています。演劇も美術も音楽も人間が表現するものを含めて、生活一般すべて「聞く力」が重要であることに違いはありません。それは俳優を志す人たちにもいえることです。

「相手役のせりふをよく聞くこと、相手の声をよく聞いて、それで動いた自分自身の気持ちの次へのせりふになる」と、稽古場で何度繰り返したかわかりません。

それはなぜか。日本の俳優には、そのことが一番欠けていることだからです。

近年、日本の俳優の多くが教科書にできたのは、田中千禾夫の『物言う術』（未来社、一九五四年）という本でした。A、俳優にとって自分に与えられた役柄の言葉ですから、それを使いこなすための「物言う術」が大事なことはいうまでもありません。

しかし、実はこの「物言う術」の前に、相手の言うことをまず聞くこと、「物聞く術」があるのです。簡単に誰にでもできるように思われるでしょうが、これができていない。

私は、「物言う術」の前に、「物聞く術」を大事にしたい。B、せりふの意思は、相手のせりふを聞くことからしか生まれないからです。そのせりふは、目の前にいる相手役を、また動かすための言葉で、④そのつながりによって物語は動きながら前へと進んでいくのです。そういう人間の関係性が今の俳優の認識に欠けている。とにかく自分のせりふだけを覚えることが大事。そこから自分のせりふの数の多少を問題にしたりする。そんな俳優に、よくめぐり合いますが、そこに何の意味があるでしょう。そうではなく、相手のせりふがあつて、それが声でこちらに投げられるから、自分のせりふが生まれるという、それだけの関係をしっかりと捉えることが、俳優のまず第一の仕事なのです。たった一言のせりふであっても、その前のせりふのすべてを受けて語られている。とても大袈裟に言えば、その一言の前には人類の歴史が流れているのです。そういう歴史を踏まえて発せられた一つの声が、強く相手を動かすのです。

C、「物言う術」だけを意識して、「自分は、自分のせりふをこう言う」と稽古前から自分の言い方だけを決めてかかる俳優がよくいます。相手役のせりふの語尾だけを覚えていたりして、語尾が変わると「あれ、終わった?」。これではどうしようもない。芝居の流れはその場で断ち切られてしまっています。D、三時間の芝居のなかで、この一行のせりふがなぜに必要なのか。⑤その一行が全体のなかでどのような意味を持っているのか、それを知ることが、俳優が戯曲を読むことなのです。言葉の基本は、自分からはじまるわけではない。相手の言葉を聞くこと、感情を読み取ることから対話がはじまっていくのです。

聞く力を養うには、日常生活から強く意識するほか、方法はないでしょう。いろいろな人たちの、いろいろな声を聞く。本から言葉を聞く。音楽から、さまざまな音を聞く。山を歩くと小さな草や花が語ってくれる。もちろん、草花が話すわけではないのですが、聞くこうとする自分があるならば小さな声は聞こえてくるはず。

何度でも繰り返します。演劇は聞くことから出発する。そして聞くことは、私たち現代人にとっての、大切な関係のレッスンでもあります。自分の短い一方的なメッセージを送りさえすればそれでいいとする人間のいかに多いことか。そして、過去の記憶の声か

ら、逃れてはいけません。

日常から何が聞こえてくるのか、俳優はそれをつねに聞き取っていく能力を必要とされるのです。

優れた俳優は皆、ちゃんと「聞く」ことができる人だと思います。たとえば稽古中に、出演者の誰かがうつかり何かの小道具を床に落として、コトンと小さな音を出したとします。すると、自然に音の方角を向く俳優と、音を無視して演技し続ける俳優とがいます。さあ、どちらが稽古場での正解でしょうか。

それは、自然に音に対して反応する俳優がいい。だって、そこで確かに音が聞こえたのですから。

（栗山民也『演出家の仕事』による。問題作成にあたり、一部を改変しました。）

*幸祥光 一八九二年～一九七七年。能楽師。

*小鼓方幸流十六世宗家 小鼓方幸流は能楽の小鼓を担当する専門職の家筋の一つ。その十六代目の当主。

*SP盤レコード（音を記録した円盤で、針を用いて再生するもの）の一種。

*武満徹 一九三〇年～一九九六年。作曲家。

*ダイアログ 言葉のやりとり。

*田中千禾夫 一九〇五年～一九九五年。劇作家、演出家。

問一 線部①「私の思う『聞く』ということは、この辞書とは少し違います」とありますが、筆者にとって「聞く」ということはどのようなことですか。本文中から二十五字以内でぬき出して書きなさい。

問二 線部②「必然よりも偶然に生まれることを、稽古場ではより優先する必要があるのです」とは、どういうことですか。それを説明した次の文の 1 2 を補うのに適切な語句を、本文中から指定の字数でぬき出して書きなさい。

演劇の稽古においては、 1 (八字) よりも、その言葉の 2 (十一字) を聞き取ろうとしなければならない、ということ。

問三 次の段落は本文中のどの位置に入りますか。本文中の【ア】～【エ】から選び、記号で答えなさい。

つまり、「聞く力」とは、単に何かが起こったときの音を聞くことだけではなく、その裏で支える人間の心の動きを聞くことが大事なのです。

問四 線部③「聞く力は、人間の普通の生活にとって重要です」とありますが、筆者の言う「聞く力」を人間の生活の中で働かせる具体例として適切ではないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本を読み、そこに書かれた表現から言葉で表しきれない微妙な意味合いをくみ取る。

イ 草花を観察し、人間の心を豊かなものにしてくれる自然の大切さを確かめる。

ウ 音楽の演奏を聴き、楽譜で再現することができない音の響きや余韻を感じ取る。

エ 人の言葉に耳を傾け、その言葉から相手の心情や感情を想像する。

問五 線部④「そのつながり」とは、どのようなつながりですか。本文中の言葉を用いて三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

問六 A D にあてはまる言葉として、適切なものを、次のア～クから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ですから イ ところが ウ いずれにしても エ あるいは オ たとえば

カ もちろん キ なぜならば ク それにしても

問七 線部⑤「その一行が全体のなかでどのような意味を持っているのか」とありますが、このことと最も関係が深いと考えられる熟語を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文意 イ 文型 ウ 文体 エ 文脈

問八 この文章の前半と後半にそれぞれ小見出しをつける場合、どのようなものがよいですか。適切なものを、次のア～カから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 何を見て、何を感じるのか イ 稽古場で作り出されるもの ウ いかに耳を養うか

エ 未知の声を出してみる オ 俳優に必要な素質とは カ 空白にこそ面白さは生まれる

問九 本文の内容と合っているものを、次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、演劇の演出家の立場から「聞く」ということの重要性を指摘している。そして、人間にはお互いの言葉の間の「空白」から相手の心の動きを読み取る能力があり、それが演劇における物語としての力を生むと考えている。

イ 筆者は、「聞く」という行為について、一般とは異なるとらえ方をしている。そして、人間生活の中で最も大切なのは聴覚を発達させることであるとし、伝達技術の発達により「聞く力」が衰えてしまった現代人の生活を危ぶんでいる。

ウ 筆者は、幸祥光や武満徹の言葉を引用して、日本の芸術においていかに「空白」が重要であるかを説明している。そして、日本の演劇においては、俳優が「物聞く術」を第一の仕事として稽古してきたことを紹介している。

エ 筆者は、対話の基本は「相手の言葉を聞くこと」であると考えている。そして、人間は日常的に「聞く」ことを通してさまざまな物事と関係を築くことが大事であり、そのレッスンを特に必要とする存在が「俳優」であると捉えている。

オ 筆者は、優れた俳優の条件として、第一に「聞く力」をあげている。そして、観客の前であつてもささいな音に過敏に反応する俳優の方が、その音を無視して演技し続ける俳優よりも優れていると評価している。

三 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。問いの中で字数に指定のあるときは、特に指示がないかぎり、句読点や符号もその字数に含めます。

主人公「枝田」は「えだいち」というニックネームで呼ばれている。四年生までは影のうすい存在であったが、担任の椎野先生に見守られながら、五年生になって同じクラスになった押野によって空き地で草野球に参加したり、クラスの友人たちと話をしたりするようになった。

学校はたのしかった。自分がきちんと学校に通って、授業に参加しているんだというあたりまえのことを誇らしく思った。もちろんそれは、押野のおかげだった。なにしろ、去年までは一日のうちにクラスメイトのだれとも話さなかったときだって少なからずあったのだから。

飼育委員になって、「しまった」と思ったのは、教室で飼う生き物を決めなくてはならないからで、それが今回の学級会の議題だった。

飼育委員は四人いて、ほか以外は女子一人に男子が二人。女子は亀山さんというちよつと変わった女の子で、自分の名前にちなんでどうしても亀を飼いたいらしい。①あとの二人は、ほかとはまたちがった感じのおとなしい男子でも仲がいい。二人でいつも一緒にいる。見た目も、髪型やメガネの感じがよく似ている。

昨日、飼育委員四人を集めて、「事前に飼育委員で相談しておくように」と、椎野先生が言ったというのに、だれ一人として相談をしようという気配がない。ほか以外の二人の男子は、なにやらひそひそと話しているみたいだけ。

彼らに任せておけばいいか、とほかはちよつと思つた。でも、ほとんどの部分では、ちゃんと決めておかなくちや、とあせつていた。だって、椎野先生と押野に迷惑がかかってしまうから。でも、なかなか言い出せなかった。だれかが声をかけてくれればいいのになと思ひながら、ほかは待つていた。今までは、ほかが行動に移す前には、すべてのことがきちんと決まつていて、ほかはそれに従うだけでよかった。けれど、今回のメンバーは②期待できそうになかった。

なんとなく彼らの視線を感じる。でも、こつちから声をかけることができない。亀山さんにも何度も視線を送っているけど、絶対

気付いているはずなのに無視している。どうしよう。学級会は五時間目だから、それまでになんとかしなくちゃいけない。

③頭の中で、もやもやと考えているうちに時間はどんどん過ぎてゆき、あつという間に昼休みになってしまった。

「ねえ、ちよつと！」

突然、亀山さんに声をかけられた。

「亀に決めたから！」

「……え、亀？ 亀だけ？」

「そう。亀にだっているんな種類がいるんだから、いいでしょ！」

そんな……、と思つたけど、反論のしようがなかった。

「あ、あとの二人は？」

「よくわかんない。えだいちから聞いておいてよ。みんなちつとも決めないんだから。とりあえず亀で決まりだから！」

時間は④刻一刻と迫っている。振り返つて二人を見ると、ほかのことをじいっと見ている。ほかは仕方なく、彼らのところへ行つた。

「亀山さんが、亀つて言ってるけど、それで決まりでいいのかな」

二人は顔を見合わせるだけで、なにも答えない。

「どう？」

何度目かの同じ質問に、

「家で熱帯魚とかいろいろ飼ってるから、べつにそんなのなんでもいい」

と片方が言つた。そして二人で目配せしあつて、ふんつと鼻で笑つた。

⑤「べつになんでもいい」

もう片方も、同じような調子でそう言つた。正直ほかはむかつとした。これじゃあ、亀山さんのほうが⑥よつぽどましだ。

「わかつたよ」

ほかは二人に背を向けた。眉間や耳のあたりが熱くなって、こめかみがじんじんした。いいかげんすぎるじゃないかと思つた。二人でにやにや笑つたりしていやな感じだ。怒るという感情を、ほかはこの日はじめて経験したのかもしれない。

五時間目はすぐにやってきて、学級会がはじまった。そして、椎野先生が、「まず飼育委員の人たちが決めたものを発表してください」と言った。

ちらっとあの二人を見ると、下を向いている。ぼくはまたむかつきたけど、深呼吸をしたらだいぶ収まった。亀山さんに目をやると、^⑦すましたままだ。だれも発表する気がないらしい。

「ほら、飼育委員！」

椎野先生にパンツと手を叩かれて、ぼくは思わず立ち上がった。立った自分にびっくりした。クラスメイトのみんなもびっくりしていたにちがいない。五年生になって、押野にからかわれたりして、多少はみんなから注目を浴びることもあったけど、それは本当に時々って感じで、ふだんのぼくは相変わらずのさえない男子だったから。

「はい、じゃあ、枝田くん発表してください」

椎野先生はいつもの笑顔にさらにうれしさが加わったような顔をしていた。やさしい親戚のおばさんみたいで、ぼくはちょっとだけ心強く思った。

「ぼくたち飼育委員が決めた、クラスで飼う生き物の候補を発表します」

ぼくはみんなのほうを向いて、ひと呼吸したあと大きな声で言った。

「ひとつめは亀です。亀といってもいろいろな種類の亀がありますが、^⑧飼いやすいのはミドリガメやゼニガメだと思います。小さくてとてもかわいいです」

言葉はすらすらと出てきた。

「それと、ぼくの意見ですが、グッピーやネオンテトラなどの熱帯魚を飼いたいと思います。赤ちゃんを産ませて育てたいからです。あと淡水魚だったら、あやめ川でつれる鮎とかハヤもいいと思います」

教室がしんとまった。自分でも驚いた。こんなふうに自分の意見を、頭の中で思っていたとおりに、みんなの前でしゃべることができるなんて。^⑨ぼくは、大きく息を吐いてからしずかに席に座った。母さんが買ってくれた水辺の生き物図鑑と熱帯魚図鑑はぼくの愛読書だ。

「おいおい、なんだよ。すごいな、今日のえだいち」

押野がおどけて沈黙を破ったと同時に、空気がはじけてみんなが笑った。椎野先生は、まっすぐにぼくを見ていた。亀山さんのほうを見たら、ピースで返してくれた。

学級会では、その後いろいろな意見が出たけど、五年二組で飼育するのは、結局グッピーとなった。ぼくはうれしかったけど、亀山さんには申し訳ないような気がした。

「ごめんね。亀飼えなくて」

あとで亀山さんに謝ったら、亀山さんは「気にしないで」と言ってくれた。

「私、グッピーも好きだから。いっぱい増やしたいよね」と。ぼくは大きくうなずいた。

ぼくたち飼育委員は、椎野先生と一緒に近所の熱帯魚屋さんに行つて、グッピーをついで六匹買った。本物のグッピーは、図鑑で見るよりももっとときれいで、思ったよりも小さかった。

水槽をきれいに洗って、酸素ポンプを取りつけた。学級会のときはちょっとむかついたけど、家で熱帯魚を飼っているという二人だけあって、手際よく準備をしてくれた。ぼくはお礼を言った。二人も「ありがとう」と言ってくれた。さつき怒っていた自分はずかしくなった。

^⑩四人で、これからの飼育日誌のつけ方や、エサのやり方を相談した。三丁目の空き地で野球をする連中とはまた違った感覚で、友達にはいろいろな種類があるんだなあ、と漠然と思った。

(^⑩ 椰月美智子『しずかな日々』による。問題作成にあたり、一部を改変しました。)

問一——線部①「あとの二人は、ぼくとはまた違った感じのおとなしい男子」とありますが、ふだんの「ぼく」はどのような男子ですか。その説明を本文中から十字以内でぬき出して書きなさい。

問二——線部②「期待できそうになかった」とありますが、具体的にどのようなことを期待できそうにないのですか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問三 — 線部③「頭の中で、もやもやと考えている」とありますが、「考えている」ことにあてはまらないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 早く決めたいから話しかけて欲しいのに、なぜ「ぼく」に話しかけて来ないのだろうか。
イ 皆の前で発表する仕事がある飼育委員になったのは失敗だったから、誰かにかわってもらいたい。
ウ 決められない場合は先生や友人の押野を困らせることになるので、きちんと決めたい。
エ 飼育委員の他の男子は二人で何か話しているから、彼らに決めてもらえばいいかな。

問四 — 線部④「刻一刻と」の意味として適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 次第次第に イ 目の前に ウ 知らないうちに エ ときどき

問五 — 線部⑤「べつになんでもいい」とありますが、このときの男子生徒の様子として適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「ぼく」のことに興味が無い様子
イ 「ぼく」を困らせてやろうという様子
ウ 「ぼく」に対していらだっている様子
エ 「ぼく」を冷淡に見下している様子

問六 — 線部⑥「よっぽどでした」とありますが、何より何の方がどう「まし」のですか。次の I ～ III にそれぞれ十字以内のことばを入れ、説明を完成させなさい。

- 飼育する生き物の種類に I 二人より、飼育する生き物を II 亀山さんが、 III ましだということ。

問七 — 線部⑦「すまし」とありますが、これと同じ意味・用法で用いられているものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 耳をすまして虫の声を聞く。 イ 深呼吸して心をすます。
ウ 的を狙いすまして放つ。 エ 暑くてもすました様子である。

問八 — 線部⑧「飼いやすいのはミドリガメやゼニガメだと思います」とありますが、どうしてこのようなことを知っているのですか。その根拠となる一文を探し、最初と最後の三字をぬき出して書きなさい。

問九 — 線部⑨「ぼくは、大きく息を吐いてからしずかに席に座った」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちを説明したものとして適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
ア 慣れない仕事を無事やりとげることが出来たというほっとした気持ち。
イ 椎野先生の期待に応えることが出来て良かったといううれしい気持ち。
ウ 考えてもいなかったことを言ってしまったというくやしい気持ち。
エ 熱帯魚を飼いたいという自分の意見を言えたという満ち足りた気持ち。

問十 — 線部⑩「友達にはいろんな種類がある」とありますが、「飼育委員」の四人はどのような「友達」にあてはまりますか。適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 何でも相談でき、一緒に行動していなくてもお互いに考えていることを理解することができる友達。
イ 動物を飼うために世話を分担するという点だけでつながり、それ以外は一切話をすることは無い友達。
ウ 皆で話し合うことはないが、自分の得意分野でそれぞれ活躍し互いの苦手な分野を補うという友達。
エ 時には怒ったり気持ちのすれ違いがあったりしても、謝れば許し、必要な時には協力することができる友達。

国語解答用紙

受験番号		
氏	名	

[illegible][illegible][illegible][illegible]

100

Circumstance	All respondents (%)	Police officers (%)	Non-police officers (%)
Self-defense	~95	~95	~95
To protect others	~85	~85	~85
To stop a crime	~75	~75	~75
To punish someone	~45	~45	~45
To show authority	~35	~35	~35